

## からす瓜の花

池松 孝子

からす瓜という周囲の木々の葉が茶色に枯れた晩秋の頃、垣根、竹藪などで目にするあの赤い実だ。つる性の多年草で、葉の裏、表、茎にも毛が密集しているため大きな木やフェンスに巻きつきやすい。生け花でも使われ秋を象徴する花材だ。鳶などにぶら下がっている朱色の実が遠目にも趣がある。

だが、その実に比べてからす瓜の花は知らない人も多いと思う。私もその一人であった。一般にからす瓜というと、この赤い実を指し、その花はまず言わない。

あるとき、図鑑を見ていて偶然、からす瓜の花の写真を目にした。白い五弁の花が開きその周りに白い糸のような、網のようなものが巻きつくようになっていた。七月から九月にかけて日没後でないと開花しないとあった。

近所の駐車場の脇に毎年、赤い実を楽しませてくれる蔓があった。ある時、意を決して、からす瓜の花たるものを見に行ってみることにした。その年の花の時期、今日こそはと思いつながら出かけた。

それは夕刻、七時前だった。毎年見かけるからす瓜に見当をつけて出かけた。行くと、もう既に花は開いていた。五枚に裂けた花弁は見事な白だ。花弁の縁には、レースそっくりの白い糸とも網とも見えるものが広がっていた。蟻や蛾が近づいてきているものもあった。「夜咲く花」のお相手は「蛾、蟻」だったのだ。

朝にはしぼむと聞いて数日後、また観察に出かけた。夜、開いていた花は見事にしぼんでいた。それはまるで小さな子供の「グー」のように花弁の先を真ん中に集めて中に畳み込んでいた。あの開いていた花の中に網状の白い糸をきれいに飲み込んでいたようだった。

根気のない、朝の忙しい私は花の閉じるところを動画で観察することは叶わなかった。しかし、自然とはなんと巧妙なそして幻想的な作業をするのだろうか。白いレースの花も見事だが、冬枯れの木々の中に輝くあの真っ赤に熟したからす瓜の実も、花に負けず見事なものだ。